

ヨハンナ・シュピリ作
たかおまゆみ訳

ヤギ飼い少年 モニ 後半

心の苦しみ

翌朝、きのうの夕方と同じように、モニは暗い気持ちでヤギたちを引き取りました。ヨーデルもせず、喜びもせず、ただ下を向いて、だれかに声をかけられやしないか、時折あたりを見回したりしました。

どうしてこんなに喜ばなくなってしまったのか、モニにも少しもわかりませんでした。チビを救うことができたのだから、喜ぼうと思ったのです。歌おうと思ったのです。ところが、そうしようとすればするほど、歌えなくなつて黙りこくつてしまいました。黒雲が心の空をおおつたようでした。

しばらくしたらまた青空が見えるさ、と考えようと思いました。でもうまくゆきませんでした。

山に着くと雨になり、みるみるうちに風も強まり嵐になりました。急いで雨岩に身をさけました。ヤギたちもみな入ってきて、どしゃぶり雨を楽しむかのようにながめていました。

チビはモニのひざのところに顔をなすりつけているのですが、いつものような安心した表情ではありません。モニが何も話さないからです。モニはチャイロにもクロにも声をかけません。ただ、手にしている杖にもたれて目をつむっています。何時間もそうやってすぎていきました。

モニは、自分が正しくないことをしたと感じていました。だから、雨岩に身をかくすことができた今日の空もように、少しだけほっとした気分でもありました。いつものように、青空を見上げることができそうにもないのです。

ああ、喜んでいたときのぼくにもどりたい、そうだ、ホテルのご主人にい

おう　そう決心するのですが、ダメだ、そしたらエルグリは、父親と主人に話をつけてくれないだろう、そしてチビがズタズタにされてしまう、という考えにまいもどってしまうのでした。

チビが殺されることを考え続けることはできませんでした。

できない、ぼくにはできないよ。そんなこと、ぜったいできない！

そう決心するたびに、心の中の重いものがますますずっしりと感じられました。そうやってどんどん苦しくなって、夕方になりました。

雨は小降りになりました。朝来た時と同じように、歌わず、ヨーデルもせず、モニは降りてゆきました。

温泉ホテルのところでパウラが待っていました。

「モニ、どうしちゃったの？　なんでちつとも歌わないの？」

パウラがしつこくたずねましたが、モニはただ、

「ぼく、歌えなくなっちゃんだ」

と答え、ヤギとともに急いで立ち去るだけでした。

パウラは、おばさんにこぼしました。

「いったいぜんたい、どうしたっていうのかしら、あの子。もう少ししたら、

モニだかどうかも怪しくなるくらいね。もし、二度と歌わないとしたら！」

「雨がひどかったからかもしれないねえ。あんなにだまったままなのは……」

おばさんが答えました。

「何でもいっぺんに起きるのね、楽しくないことは。最初はペンダントをなくしちゃうし　、そして今度は、あのヤギ飼い少年の歌が聞けなくなってしまうんだもの。まったく泣きつ面に蜂だわ。もう、うちへ帰りたい……」

「療養がおわったら、帰りますよ」

おばさんは、きつぱりと告げました。

翌朝も空は灰色でした。モニはまた　雨岩　の下にすわり、ぐるぐると心廻る思いにしないでいました。よほど考えて、「よし、ご主人にいおう」と気持ちを決めるのですが、そうすると、とさつ用のナイフが目の前にちらついてしまうのでした。そしてもとのもくあみになっしまいました。あまりに

も考えこんでしまったモニは、夕方にはくたびれきって、老人さながらの足取りで温泉ホテルに降りてきました。

ヤギ小屋の入り口のところにホテルの主人が待ちかまえていて、モニをどなりつけました。

「なんてこつたい。かたつむりにでもなつて山を降りてきたつてのかい？ ヤギたちはビショビショじゃないか！ まったくおまえのやることといったら！」

主人がモニをどなったことは、これまでに一度もありませんでした。明るいモニが気に入っていたからです。ところが、今日のモニときたら明るくないどころか、重病のような顔をしていました。

おまけに、さつき、泊まり客の少女が失くしなしものことであつたえてきたのです。高価なペンダントは、部屋か廊下か、さもなくば建物の入り口のところで落とされたにちがいない。その日は夕方にヤギ飼いの少年の歌を聞くためにホテルの入り口まで出ただけだから、という内容でした。

考えられるのは、この建物の中で高価なものがなくなつた、ということです。

主人はそのことがひどくしゃくにさわつて、さつき使用人たちを集めて、聞きただしたり、おどしてみたり、しまいには見つけた者に報賞金ほうしょうきんをとらせるとまでいい放つてきましたから、使用人たちの間では、失くしなしもの話でもちきりになっていました。

翌朝、パウラは眠い目をこすりながら、外でモニを待ちぶせました。

のろのろとひきずるような足取りでやってきたモニに、大声でいいました。

「モニ、あなた、いったい正真正銘せいせいめいめいのモニなの？ 『ほら 空はとても青いよ。ぼくはきつと死ぬまで喜んでるよ』つて、歌つてたじゃない？」

モニはそれでも悲しげに通りすぎてゆくばかりでした。

パウラの言葉が心に重苦しく響きました……。

ああ、前のぼくとなんてちがつんだらうつ！ もう一度あの日に戻れたら、

と思いました。

雨はやんだものの、高い山はいまだに霧^{きり}がたちこめていました。

「昼ごろ、ようやく空が明るくなりはじめました。岩の外に出ると、雲が分かれてきたのがよくわかりました。ヤギたちはうれしがって、あっちこつちとどびはねています。顔をのぞかせた太陽は、やさしくモニをつつみました。」

「ああ、チビ！ これ以上たえられないよ。自分のできることをしたのに、心が重くなるばかりだ。でもそうしないとおまえは殺されちゃうっていうんだよ。いったい、ぼく、どうしたらいい？」

モニはチビを抱きしめて泣きました。するとチビもせつなげになき、モニの胸深くに顔をうずめるのでした。

ホテルの入り口のところに、パウラが見張り番のように立っていました。

「まだ、歌なしモニなの？ いったいどうしたっていうのよ、そんなに悲しそうな顔して」

「ちよつと知らせに行こうと思って……」

「何を？ 誰に？ ね、何のこと？」

モニの言葉にむかって、パウラはたたみかけるようにたずねました。

「ここのご主人のどこさ。見つけもの……をしたんだ」

「見つけもの!? どんなもの？ わたしも失^なくしたのよ、きれいなペンダント
トなんだけど」

「ほ、ほんとかい!?!……ペンダントを失^なくしたのかい？」

「えっ? どういうこと？」

パウラは思わずさげんでしまいました。

「ペンダントよ、きれいな石が散りばめてあるの」

「うん、まちがいない……」

「どこにあるの？ あなたが見つけたの？」

「ちがうよ、エルグリって子だよ」

それからパウラはエルグリの居場所^{いほしほ}をくわしく聞き出し、今にもキュルビスへ人をやるうとするほどでした。

「ぼくが急いで行ってくるよ。もし、まだエルグリのところにあつたら、持

「つてきてあげる」

『もし』？ 『どうして』 『もし』なの？ 『どうして』とっ、」

それ以上、モニは話をする事ができませんでした。拾い物のことを秘密にするために何があったのか、モニがそれをどうやって手助けしたのか、そしてどんなに苦しくなったのか。

パウラは心をこめていいました。

「ねえ、モニ、いったい何があったのか、くわしく話してくれない？ わたし、あなたのことなら何でも喜んで話を聞けると思うの」

そんなパウラに、モニは自分の心を、ついに打ち明けました。ひとつひとつ話しました。そして、もうこれ以上、心が重くなることにたえられなくなったところまで話しました。パウラはいちいちうなずいて聞いていました。

「モニ、ペンダントのこと、ご主人に知らせてきた方がいいわ。大切なことですよ。それに、そうしたとしてもチビが悲しい目にあわない方法がきっとあるから」

モニにはその意味がわかりませんでした。パウラは続けました。

「それと、エルグリに、『ペンダントをとどけたら十フランもらえる』つていうといい」

「十フラン？」

モニはたまげてしまいました。エルグリがいくらでそれを売ろうとしたかは、パウラにつたえなかつたのですが、エルグリの口から出た金額よりもよほど多かつたからです

モニは立ち上がりました。どうしても今日中にキュルビスまで行こうと思いました。そうすれば明日の朝、パウラにペンダントをわたせるかもしれない。とたんに、ほんとうにそのとたんに心が軽くなったような気がして、思わず何度かとびはねてから、パウラと別れました。

おばあさんにひとこと告げ、モニは暗い道をキュルビスに向けて駆けだしました。

キュルビスではうまいこと、エルグリをつかまえることができました。エルグリは、はじめのうち、心をこじあけられたようなしびい顔をしていまし

たが、もはやばれてしまったとさとり、こういいました。

「それで、その子は何かお礼をくれるってのか？」

「考えられるかい？　十フランくれるっていうんだよ」

今度はエルグリが仰天する番でした。うそをついて四フランもうけようと思っていたのに、真正直にとどけて十フランもらえらえるというのです。

エルグリは後悔していました。見つけた時、すぐに建物の中に入り、届ければよかったと。ほんの入り口のところでしたから。でも、もうおそすぎました。

モニはエルグリからペンダントを受け取ると、いちもくさんに家にもどりました。もう真夜中になっていました。

モニ　もうひとたび歌う

いっぽうパウラは、あのあと、主人と長い話し合いをしていました。部屋から出てきた時は、疲れのみえる面持ちでしたが、微笑みをうかべていました。そしておばさんに、明日は早く起こしてね、どうしてもモニに会いたいから、とたのむと、ベッドに倒れこみました。

静かに静かに朝もやがあたりをつつみはじめたころ、パウラはガバツとはね起きました。急いで身支度をして、入り口のところまでモニを待ちました。ほどなくヤギたちの鐘の音が鳴り響いてきました。

「モーニーッ！　あなたまだ歌わないの？」

パウラがありつたけの大声を出すと、モニがこちらにやってきて、いいました。

「だめだよ……、チビのことを思うとね。歌えない、もう二度とね……。はい、これ」

そういうと、パウラの手には小さい包みをのせました。モニのおばあさんが、ていねいに三枚も四枚もの紙に包んだものでした。

パウラは包みをあけてペンダントを手にとると、じっと見つめていました。

それはまぎれもなく彼女のものでした。どこもこわれていませんでした。

「モニ、ありがとう。あなたがいなくなったら、このペンダントに二度とおめにかかれなかった。だから、こんどはわたしがあなたに喜びをあげる番よ。さ、行って、チビちゃんを連れてきて。今日からあの子はあなたのものよ。」

モニは、なんのことやらさっぱりわかりませんでした。

「いったいどういうことか、って聞きたいの？　きのうの夜ね、わたし、チビちゃんを買ったのよ。そして今朝、あなたに贈るってこと。これでまた歌える？」

モニは、ぼかんと口をあけてパウラを見つめました。

「まだ、わかんないの？　チビは今日からあなたのものなの！」

モニの目がみるまに大きくなり、その脚はまるで気がくるったみたいにヤギ小屋に向かってかけだしていました。

モニはチビを抱きあげるとほおずりをして、きつく抱きしめました。

「ありがとう！　ありがとう！　ありがとう！　千回だっていうよ！　どんなお礼だつてするよ！」

「それじゃ、今、あの歌を一回歌って。しばらく歌っていなかったからうまく歌えるかどうか、わからないものね。」

モニはチビとおどるようにして歌いはじめました。そしてヤギたちと山に向かいました。その歌声は谷間中にこだましましたので、人びとはねぼけてつぶやきました。

「ほう、ヤギ飼いのあの子は、またいい天気にくわしたようだな。」

そして、もう少しまどろむのでした。

ちよつと小高くなつたところまでたどり着いて見下ろすと、まだパウラが入り口に立っていました。大きく前にふみだして、できるかぎりの大声で歌いました。

ほら、空はとても青いよ

ぼくはきつと死ぬまで喜んでるよ

その日、モ二の口から歌声がとぎれることはありませんでした。赤や黄色や紫をした高山の小さな花が、雨あがりの澄んだ空気に輝きながら、こぼれるばかりに咲ききそついています。草の一本一本までがとてもかくわしく匂うようでした。

ヤギたちもほんとうに気持ちよさそうでした。向こうの方には、アルプスカモシカの姿も見えます。遠くには、白いいただきをつらねた高い山々がみわたすかぎりのパノラマを誇っています。

「チビ、おまえ死ななくていいんだよ。もうずっとぼくといっしょに、草を食べにきていいんだよ。ずっと！」

夕方、歌声とヨーデルを響かせて山をくだってきたモ二は、温泉ホテルのヤギ小屋にクロをもどすと、チビを肩に抱き上げました。このまま、モ二はチビを連れて帰っていいのです。チビは、クロからはなれがたいような表情も見せず、モ二に抱かれて安心しきつていました。モ二のほうがお母さんよりももつと優しく抱っこしてくれるのをわかっていたのでしょう。

おばあさんの待つ家が見えてきたあたりで、チビはもぞもぞしました。どうも見たことが無いところだと思つたのでしょう。それに、モ二きたらさつそく大きな声を出しましたから。

「ね、ぼくのなんだよ、ばあちゃん！ ぼくのなんだよ！」

聞きつけたおばあさんには何のことだか、さっぱりわかりませんでした。

それなのにモ二ときたら、わけを説明もせずに、物置小屋にいちもくさんに向かいました。そして、干し草のかたわらにチビのために、こざつぱりとしてやわらかなベットの、刈り取ったばかりの草でとのえてやりました。

「ほら、チビ。新しいおうちだよ、ぐっすりおやすみ。毎日、毎日、きれいなベットをこしらえてあげるからね」

チビを寝かせると、モ二は、皆目わけのわからないままでいるおばあさんの待つ部屋にもどりました。いっしょに夕食をとりながら、始めからの顛末をおばあさんに話しました。三日三晩悩み続けたあとに起きた、今日のすばらしい出来事をです。

おばあさんは静かに聞いてくれたあとに、うん、うんとうなずいて、こう

いいました。

「モ二、今日のことを、一生忘れるでないよ。おまえがチビちゃんを守るために苦しんでいるときにも、神さまはきつとおまえとチビちゃんをご覧だったのだよ。おまえが良き方を選んだからこそ、すべてを良くしてくださったにちがいない」

「わすれっこないよ。正しい方を選べば、他のことは、ちゃんとうまくいくんだね！」モ二も、うなずきました。

それからモ二は、自分のベッドに行く前にもう一度、チビを見にいきました。本当に小屋に眠っているのだということを、本当に自分のチビなのだということを、確かめないではいられなかったのです。

エルグリは約束どおり、十フランを受け取りました。けれども、それで話はすっかりおしまいというわけにはいきませんでした。

エルグリはホテルの主人につかまって、こつぴどく叱られました。

「エルグリ！ 二度とうちのホテルの評判を落とすようなことをしてみる、ゆるさんからな！ あそこにヤナギの枝でできたムチがかかっているだろう。見えるか？ 二度とやってみる、あれがうなるからな。よく覚えとけ！」

さらに、もつと続きがありました。

ペンダント事件のあと、ホテルで何かがなくなると、すぐにみんながこう噂うわさしたのです。

「またか。キュルビス村のエルグリが盗とつたに決まっているじゃないか！」

事件はもちろんキュルビス村にも伝わりました。村でも何かがあると、

「返せよ、エルグリ。おまえだろ？」

と、大人も子どももいうようになりました。エルグリが、何も盗とっていない、何もしてないと、必死であらがつても、「おまえのことなら、もうとうに知れているさ」といって、だれもエルグリのことを信用しませんでした。

ああ、あのときすぐにペンダントを主人にわたせばよかったと、それからのエルグリは何度思っただかしれやしません。

モ二のほうは夏の間、世界中のだれよりも満ち足りた気持ちで、ヤギたち

を連れ、山のいただきでヨーデルをしては、歌って過ごしていました。

幸せな気持ちをうんと引き延ばして 岩の舞台 にひっくりかえって伸びをする、陽射しがいつぱいの谷が眼下に見えました。その明るさに、あのとき 雨岩 のところにすわっていたときの、押しつぶされるような暗澹とした気持ちを はつきりと思い出しました。

「もう二度とあんな思いをすることはないよ。だいじょうぶ、正しいと思うことをすればだいじょうぶ」と自分につぶやきました。

そうやってしばらく物思いにふけているあいだにも、ヤギたちが一匹、二匹とやって来ては、「どうして、こっちにいつしよに來ないのか？」と、不思議そうな顔をしてモニを見ていました。今日のモニは、それでもヤギたちを少し放っていました。

ただし、チビがモニを呼んだときだけはまったく別でした。すぐにチビの方に行ってやりました。チビはモニのものです。モニのいちばん大切な宝なのです。

(完)